

令和 5 年度 在外研究員 報告書

所 属	法学部 法学科	職名・氏名	教授 足立 和彦
調査研究題目	モーパッサン後期作品の研究		
研究先国	フランス	研究機関	ピカルディ・ジュール・ヴェルヌ大学
研究期間	令和 5 年 8 月 24 日 ～令和 7 年 8 月 23 日		

長期支給研究員として、2023 年 8 月 24 日から 2025 年 8 月 23 日まで、フランス北部の都市アミアンにあるピカルディ・ジュール・ヴェルヌ大学の客員研究員として、「モーパッサン後期作品の研究」という題目で研究を行った。

大学では「文学および言語の接触・関係に関する研究所」内の「小説・ロマネスク研究班」に所属、月 1 回程度のセミナーに出席し、研究者と意見交換を行った。受け入れ教員ノエル・ベナムー、班のリーダーのクリストフ・ルフエ、およびジェレミー・ナウム氏らとの交流はとくに有意義なものであり、おおいに学ぶところがあった。2025 年 6 月 6 日にはこの班において「*Maupassant, conteur dans les journaux*」（新聞小説家モーパッサン）と題する発表を行い、モーパッサンの短編小説がクロニックという枠組みのなかで誕生したことの意義を論じた。発表後には充実した質疑応答があり、たいへんに啓発されるものとなった。

個人の研究としてはパリ国立図書館に通い、資料収集および繙読を行った。1885 年以降の後期モーパッサンの活動を、中短編・長編小説のみに限定せず、クロニックや旅行記を含めて分析し、「主体の把握しきれない自己の探求」として総合的に理解することを目指した。京都大学人文学研究所 共同研究・基盤研究（C）班「ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義」（代表：森本淳生）の共同研究員であることとも関連し、とくに同時代の象徴主義との関係も視野に収めながら研究を行った。その成果の一部は研究班の例会において「モーパッサン『水の上』、あるいは詩への回帰」と題して、2024 年 7 月 20 日に発表を行った（遠隔にて出席）。1888 年刊行の旅行記『水の上』において、水のように流動的で不確かな自我がどのように描かれているかを分析して論じたものである。

一方、「ゾラ・セミナー」に定期的に参加し、発表を聴講するとともに、アラン・パジェス、オリヴィエ・ランブローゾ氏らと交流を深めた。またルーアンを本拠とする「フロベール・モーパッサン友の会」の会合にも出席し、代表を務めるイヴァン・ルクレール氏らとも交流した。この会の企画する旅行によって、ノルマンディー、エトルタの町に現存するモーパッサンの別荘「ギエット荘」を見学する機会が得られたのは大きな喜びだった。さらに、かつての博士論文の指導教官であるマリアヌ・ビュリー氏とも連絡を取り合い、貴重な助言を得ることができた。

フランス滞在中には、さらに 2 度、研究発表を行う機会を得た。2024 年 11 月 22 日にはニューヨーク大学パリ・キャンパスにて、書簡体小説に関する国際コロクに出席、「*Le lecteur comme destinataire : les contes épistolaires de Maupassant*」（名宛人としての読者：モーパッサンの書簡体短編小説）と題する発表を行った。20 数編の書簡からなる小説を分析し、その特徴を明らかにすると同時に、新聞という発表媒体と書簡体との関係について論じた。この成果は 2026 年中に論文集として刊行される予定である。また、2025 年 5 月 22 日には、ヴィクトル・ユゴー友の会において「*Voir l'invisible : le trajet de Maupassant jusqu'au "Horla"*」（見えないものを見る：『オルラ』へ到るモーパッサンの道程）と題する講演を行った。「見えないもの」に執着することによって、モーパッサンが実証主義の時代の新しい「幻想小説」を生み出すに至った道筋を分析したものである。会場はパリ市役所の議会場であり、由緒ある場に登壇できたことを誇らしく思う。

在外研究期間中に、上記の研究と並行する形で、安達孝信氏（名城大学外国学部准教授）と共同で『メダンのタベ』の翻訳を行った。これはエミール・ゾラおよび、モーパッサンを含む 5 人の作家による共作短編集である。翻訳に際しては国立図書館で関連する資料を収集し、その成果を詳細な年譜・および「訳者解題」にまとめることができた（『メダンのタベ——戦争と女たち』、幻戯書房、2025 年 11 月刊行予定）。この翻訳および解説の執筆は、従来の研究の範囲を広げることにつながり、今後の研究にもおおいに資するものと考えている。

フランス滞在中には、パリにおけるモーパッサンやフロベールら、19 世紀の作家のゆかりの場所のほか、パリ郊外メダンのゾラの家などを訪れ、知見を深めることができたのも貴重な収穫である。

その他、滞在期間中の業績に以下がある。「落語の近代化？ 三遊亭円朝『名人長二』とモーパッサン」（森本淳生・鈴木亘編『落語と学問する』、水声社、2025 年 3 月）、「日常の語り手——マラルメの見るモーパッサン」（坂巻康司・中畑寛之編『詩人の場所、星々の時間、関西マラルメ研究会二十周年記念論文集』、水声社、2025 年 9 月）。